

* 登場人物

中村雪絵（二八） デパートの美容部員。

佐藤（三三） 朝風市再生プロジェクトのリーダー

高杉（三五） 同右。メンバー（女性）。

山田（三二） 同右。メンバー。

菊地（三〇） 同右。メンバー。

竹内（二八） 同右。メンバー。

森下（五五） 雪絵の売り場の統括部長。

智子（五五） 雪絵の母。

渡辺梅子（七五） 化粧品売り場に来た女性。

他

《あらすじ》

中村雪絵（二八）は北海道朝風市のデパートの化粧品売り場で働いている。

朝風市は、財政再建団体になっていて、商工会議所が中心となる再生プロジェクトチームが立ち上がった。

特に目標もなく日々を送る雪絵は、朝風出身ということだけで、そのプロジェクトチームでの活動を上司から押し付けられてしまう。

職場に訪れた客の話から、街が一番発展した頃に立てられ、今は廃墟同然になってしまった通称・銀ビルを再生し、街を活気付けようと考え、が、街の人の折り合いや自分の企画力不足に悩む日々を送る。数々の困難の末、企画が実現したとき、街の再生には物を動かすことよりも、人の心を動かすことのほうが大切だと雪絵は気付く。と、同時に、自分の心もイキイキと動いていることにも気がつくのだった。タイトル「銀ビルを回せ！」

銀ビルを回せ！

成樹久美子

SE 目覚ましのアラーム。

雪絵「(のび) あーっ、あーあ」

階段を下りる足音(裸足)。

居間のドアを開ける音。

生卵を混ぜる音。

雪絵「(少し眠た気) おはよう」

智子「あら、もうちよつと早く起きてくれ
ば良かったのに」

雪絵「なんで？」

智子「ニュースで東京の桜、やってたのよ。

すごく綺麗だったわ」

雪絵「そっかあ、じゃあ、こっちももう少

しで咲くね」

TVニュース「続いて、北海道からお伝え

します。先月、財政再建団体の指定を受

けた朝風市の市長選は、昨日、立候補の

受付が締め切られました。朝風市は現在

の市長の辞職を受けて、次の市長選の投

票日を四月二十日とし、立候補を受け付

けていました。立候補は、昨日午後五時

で締め切られ……」

智子「新しい市長さんになったら、うちの

街も少しはよくなるかしらね？ あ、雪

絵も早く食べちゃいなさい」

雪絵「あー？ また卵だあ」

智子「これから住民税も水道代も上がるで

しよ？ 節約しないと」

雪絵「ふう。厳しくなるね」

SE チャイム

従業員のざわつき。

森下「朝礼を始めます。先日、掲示板に募

集を貼っておきましたが、朝風市の再生

プロジェクトに、ぜひ、参加したいとい

う人、いませんか？」

従業員一同「……(無言)」

森下「では、私から……。中村雪絵さん、

お願いします」

雪絵「……」

SE 拍手

森下「中村さん？」

雪絵「はっ、はい？」

雪絵「え、私、無理です！ 出来ません！」

森下「大丈夫。みなさんどうですか？」

SE 拍手

「がんばって」などの声。

森下「じゃあ、後で資料を渡します。では、

今日も一日、頑張りましょう」

従業員一同「よろしくお願いします！」

雪絵「森下部長！」

森下「ん？」

雪絵「私、この話、お受けできません。こ

んな大きな仕事ムリです」

森下「中村さん、今年、十年目だし、大丈

夫、大丈夫」

雪絵「いや、そう簡単に言われなくても」

森下「あ、これ、資料。じゃあ、頼んだよ」

雪絵「部長！ ……そんな」

(間)

佐藤「このプロジェクトは、財政再建団体

入りした、朝風市の再生を目標としてい

ます。私たち商工会議所は主に商業の再

生を専門に担当します。他に、文化・教

育については……」

SE ドアの開く音。

雪絵「すいません……、遅くなりました」

佐藤「あ、自己紹介をお願いします」

雪絵「中村雪絵です。七番館デパートの化

粧品売り場におります」

竹内・菊地・山田・高杉「よろしくお願

いします(個々に)」

佐藤「よろしくお願います。じゃあ、時

間もアレなので進めますね。文化・教育

については、まとめて教育委員会が担当

します。

(ここから高杉の台詞がかぶる)

高齢者対策は、保健課が中心になって進

めていきます。企画はそれぞれの部門が計画・実行します。実質的には、各部門がバラバラに動くのではなく……」

高杉「（小声で）良かったわ。女の人が来てくれて。高杉です。よろしくね」

雪絵「（小声で）よろしくお願ひします」

竹内「お！ えっ？ あー！」

（佐藤の台詞止まる）

佐藤「ちよつと竹内くん、集中してよ」

竹内「五年二組だった中村さん？」

雪絵「そうです」

竹内「あ、あの、三組だった竹内です」

菊地「何、同じ小学校だったの？」

雪絵「……。あ！ リトルリーグで、エースだった竹内……亮太くん？」

山田「え？ 五年生で？」

菊地「すごいねえ」

高杉「ちよつと、脱線してるわよ」

山田「まあまあ。よし、それじゃあ、今日は顔合わせついで、飲みに行きませんか？」

竹内「山田さんお勧めの店ありますか？」

菊地「よつ、銀座商店街の老舗、山田青果店の二代目！」

山田「（落語風）青果店っていつても花屋じゃないよ。それに和菓子やでもない」

高杉「山田さん、若いのに落語家みたいね」

山田「『昭和の落語名人の特選集』持つてるんですよ」

竹内「何ですかそれ！」

菊地「マニアックですねー」

山田「へへ、どうもすいません」

佐藤「はいはい！ 話続けますよ！」

（間）

SE デパートの賑わい。

化粧品売場の店員と客のやり取り。

店員（OFF）「お待たせしました。それでは二千と六百円のお返しになります。

先ほどご紹介しましたサンプル、こちら

と一緒に入れておきますね。ぜひお試し

になってくださいね。ありがとうございます

ました」

雪絵「いらつしやいませ。本日はどのような物をお探しでしたか？」

梅子「化粧水と、乳液と、そろそろ夏用のファンデーションも出てるのかしら？」

雪絵「（ぶつぶつ）あーあ、街の再生プロジェクトの企画、今日までに持って来

って言われたけど、何も思いつかない」

梅子「店員さん？」

雪絵「え、あ、スママセン。お客様のお肌があんまりキレイなので、見とれてしま

いました」

梅子「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない。そんな言葉、久しぶりだわ」

雪絵「お客様の周りの方、照れ屋な方が多いんじゃないですか？」

梅子「まあ。私が現役の頃にあなたに出会ってたら、その話術、すぐにスカウトしてたわ」

雪絵「スカウト？」

梅子「私ね、ブティックを経営してたのよ」

雪絵「まあ、素敵ですね」

梅子「あの銀ビルの五階にね」

雪絵「銀……ビル？」

梅子「ええ、銀座ビルディング。今や幽霊ビルとか言われてるけど」

雪絵「銀座ビルディング……」

梅子「昔は、この朝風市の銀座通りも活気があってね、日曜ともなれば、家族みんなで出かけたものよ。銀座通りをブラブラ、略して『銀ブラ』、今で言う、ウインドウショッピングね」

雪絵「私も父と行ったことがあります」

SE 遊園地風の音楽。（回想）

雪絵（三）「お父さん、次はメリーゴーラウンドに乗りたい！ それからキャンデー

いつかむゲームもしたい！」

順二（三十）「いいぞ。その後は、じゃあ、一番上の回る食堂でジュースを飲もう」

雪絵（三）「お父さん、雪絵、これがい

い！」

順二（三十）「ようし、クリームソーダだな？」

雪絵（三）「ねえ、雪絵のお家はどこ？」

順二(三十)「あ、あの赤い屋根かな？」

(回想終了)

梅子「店員さん。店員さん？」

雪絵「あ、すみません。素敵なお話をありがとうございます。」

梅子「まあ。お上手ね。じゃあ、そちらの栄養クリームもくださる？」

雪絵「はい！ありがとうございます！」

SE ドアが開く音。

雪絵「おつかれさまです！」

佐藤「あれ、昨日と違って、元気ですね」

雪絵「はい！ いい企画を見つけたので」

佐藤「じゃあ、揃ったので、始めましょう。」

雪絵「銀ビルの回します！」

菊地「銀ビルの回す？」

雪絵「はい、そうです。ご存知のとおり、銀座ビルディング、通称・銀ビルは銀座通りの入り口にあつて、この朝風市の発展の象徴でもありました。あのビルの最上階、七階は展望レストランになつていて、ゆつくりと回転し、朝風市内を一望できます」

山田「ああ、札幌の駅前にも、そんなビルあつたよね」

雪絵「はい。今の銀ビルは、テナントも出て行ってしまつて、通り抜けに使われて

いるだけです。でも、銀ビルはみんなが集まれる場所にあるんですよ。これを復活させたいんです」

竹内「銀ビルのレストランか」

山田「あそこのカレー、うまかつたよな」

雪絵「ですから、あの展望台をもう一度回し、銀ビルを昭和の思い出がなく、家族で集える、デパートとして、蘇らせた

いんです」

一同「……」

雪絵「あの、みなさん？」

佐藤「えーつと、中村さん、それはちよつと、企画としては壮大すぎると思うな」

高杉「テナントはどうやって集めるの？」

山田「従業員、集めるの大変そう」

佐藤「商工会としては、今の商店街の皆さんとは、波風を立てたくないんですね」

山田「七番館の売り上げ持っていられるかもよ」

雪絵「あ……：そうですね」

竹内「広告費もハンパじゃないなあ」

雪絵「僕は面白そうだと思います」

菊地「競争相手がいるのって、活気をつけるのにはいいと思いませんか？」

雪絵「どうでしょうか？ みなさん」

佐藤「出来るのかなあ……」

雪絵「やりましょうよ、ね、ね！」

SE すずめのさえずり。

雪絵「雪絵！ 起きなさい！ 雪絵！」

雪絵「おはよう」

雪絵「おはようじゃないわよ。新聞！ ほか、載つてゐるわよ。あんた、もう少しイ服なかつたの？」

雪絵「仕方ないじゃない。七番館の美容部員の制服なんだから」

雪絵「何々？ 小さい頃のお父さんと思

いで、今の朝風市に暮らす皆さんに、街のよさを見直してほしいと思つて、銀ビルの展望レストランをもう一度回したい

のです、と語る中村雪絵さん……やるじやない！」

雪絵「へへっ、記事にしてもらつて、広告費を浮かせたのよね」

雪絵「さすがお父さんの子だわ」

雪絵「でしょ？」

(間)

佐藤「テナントの募集は、みんなで行いませうが、最終的な契約は、高杉さんにまかせてもらいます。展望レストランは、中

村さんが中心で」

SE ドアが開く音。

藤田「失礼しますよ」

菊地「どちらさんですか？」

山田「あ、藤田さん……」

藤田「なんだ、山田の息子もおったのか」

雪絵「（小声で）あの方、誰ですか？」

高杉「（小声で）銀座通りの入り口にある

薬局の主人よ」

藤田「（咳払い）おっほん。いかにも」

佐藤「ようこそ、藤田さん。今日はいったい

どういったご用件で」

藤田「新聞を見た。あんたたちは甘い！

誰だね、言いだしっぺは」

雪絵「私です」

藤田「なんだ、孫みたいな小娘か」

雪絵「聞いてください！ 私が小さい頃、

この街はキラキラ輝いてました。銀座通

りはいつも人がたくさん歩いていて、ど

このお店に行っても、賑わってました」

藤田「まあな」

雪絵「でも今は、日曜でさえ、郊外の巨大

スーパーにみんな行ってしまって、銀座

通りはほとんど人が歩いていません。だ

から銀ビルをもう一度回して……」

藤田「ふん、どうだかな。一時のお祭り騒

ぎに終わるなら、かえって迷惑だ」

雪絵「もちろん、そうならないようにする

つもりです」

藤田「あんたの家は何屋だ」

雪絵「父はサラリーマンでした」

藤田「私たち店を構える者は、この街に根

を下ろして、この街に骨をうずめる覚悟

で生きているんだよ。あんたたち勤め人

とは違う」

雪絵「でも、でも街を愛する気持ちは同じ

じゃないじゃないんですか？」

藤田「一時だけの客足じゃ、私らは生活で

きないんだよ」

雪絵「それは……」

藤田「とにかく、もっとマシな計画をやっ

てくれ」

SE ドアの開閉音。

雪絵「はあ……参ったなあ……」

菊地「藤田さんって、頑固ジジイなんです

か？」

高杉「ジジイは言いすぎよ」

山田「銀座商店街の会長さんなんですよ。

さっきの通り、良い時も悪いときも知っ

てる人ですからねえ」

高杉「確かにあの薬局、頼りにされてるわ

よね。夜、遅くまでやってるし」

山田「ええ。藤田薬局さんは、銀ビルが建

つときに、ビルのオーナーがわざわざお

願いして、入ってもらったそうです」

SE デパートの賑わい。

梅子「こんにちは」

雪絵「あ、先日はありがとうございました。

渡辺様」

梅子「あら、覚えててくださったの？」

雪絵「もちろんです。お名前は梅子さまで

らっしゃいましたね？ 今、カルテを出

しますので」

梅子「新聞、見たわよ。ずいぶん思いきつ

たことを考えたものね」

雪絵「渡辺様のお話で思いついたんですよ」

梅子「ありがとう。私もあのビルにはいろ

んな思い出があるのよ。楽しかったこと

も、つらかったことも、全部、あのビル

に詰まっているとっていいくらい」

雪絵「あ、このう、これからも、時々でいいの

で、銀ビルの話、聞かせていただけませ

んか？」

梅子「こんな私の話でよければいくらでも

しますよ」

雪絵「ありがとうございます」

梅子「じゃあ、今日はこの間いただいた乳

液と、これと、そっちのと」

雪絵「かしこまりました。（間）ありがと

うございました。またのお越しをお待ち

しております」

（間）

佐藤「あと一ヶ月になったんだけど、それ
ぞれの担当箇所の進み具合は？」

竹内「法律関係は大丈夫です」

佐藤「展望レストランのほうは？」

雪絵「調理器具、設備のほうは完了です。

あとは、従業員の面接を」

高杉「テナントが……。予想はしてたけど、
これほどまでに集まらないとはね」

山田「高杉さんでもムリって言うんじゃない、
こりや難しいなあ」

雪絵「山田さん、商店街の会長さんと話し
合うことって出来ますか？」

山田「僕が？ 藤田さんと？ 無理無理。見
たでしょ？ この間の会長さん」

雪絵「やっぱり、最初から無理だったんでし
ょうか、この企画」

菊地「商工会議所の立場としては、傷が深く
ならないうちに、新しい企画を立てたほ
うが無難というか……」

佐藤「ちよつと待ってよ、誰もやめるなん
て言っていないし、だいたい菊地くんは」

SE ドアが開く音。

雪絵「出た」

藤田「ん？」

雪絵「い、いえ……」

山田「いやあ、藤田さん。いつ来るか、い
つ来るかとウワサしてたんですよ」

藤田「どうですかね。テナントはそこそこ

入りましたか？」

佐藤「(咳払いして) まあ順調です」

藤田「聞こえてくる噂では……」

雪絵「プロジェクトのメンバーは頑張ってお
りますから、ご心配はいりません」

藤田「あんたは、自分のデパートにどんなお
客が来ているのか、よく見たことがある
のかな？」

雪絵「それくらい私にだってわかります。
土日はたくさんのお客様で忙しいですか
ら」

藤田「そのお客さまたちは、どんな仕事をし
ている人たちなのか、あんたは見ている
のかな？ この街の人たちがどんな仕事
を持ち、どんな暮らしをしているのか、
見たことがあるのかな？」

雪絵「それは……」

藤田「話にならないようだ。失礼するよ」

SE ドアの開閉音。

菊地「なんだ、あのじいさん」

高杉「だからジイサンは言はずぎ」

雪絵「現役……なんですね」

山田「現役？」

雪絵「もう私のおじいちゃんみたいな年だけ
ど、言ってることは正しいんですよね。
悔しいなあ。現役なんだ」

一同「(口々に) うーっーん」

SE 喫茶店の風景。

雪絵「ゴメンね竹内くん、プロジェクトの
後までつき合わせちゃって」

竹内「気にすんなよ。同級生じゃん」

雪絵「はあ……ホントにこれで良かったの
かなあ」

竹内「何が？」

雪絵「銀ビルを回すって企画」

竹内「俺はいい企画だと思うけど」

雪絵「やっぱり無理だったのかなあ」

雪絵「だって、何万人も住んでるこの街を
建て直そう、活気づけようなんて、自信
過剰もいいとこだわ。何様ってカンジ」

竹内「誰かがやらなきゃならないことだよ。
それが俺たちだったってことさ」

雪絵「私、今、すぐ迷ってる。大変なプ
ロジェクト引き受けちゃったって」

竹内「迷ってるって……」

雪絵「私が抜けても、企画は進むよね」

竹内「何言ってるんだよ。ここまでやって
きたんじゃない。俺はさ、大好きだよ、こ
の街の景色も、ここに住む人も」

雪絵「私も……そう思ってる」

竹内「中村さんが言い出した企画かもしれ
ないけど、今は俺たちの、街の人みんな
の企画になったんだから」

雪絵「みんなの企画……」

竹内「そう。だから辞めるなんて言うなよ」

雪絵「(力なく) うん」
竹内「中村さんがいないと寂しいからさ」

SE 静かな商店街の音。
響くハイヒールの音。

雪絵「あ……、こ、こんばんは」

藤田「こんな時間まで無駄な会議をしてたのかい？」

雪絵「ムダじゃありません。ちよつとは進んでるんです」

藤田「そりゃあ良かったね。どうだい、ちよつとうちの店を見ていかないか？」

雪絵「(遠慮) いえ、もう遅いので」
藤田「いいから」

SE 商店のドアチャイム

雪絵「わあ、何でもそろってるんですね」

藤田「お客さんの都合に合わせているうちに増えてしまった」

雪絵「え、薬局って、文房具も売ってるんですか？」

藤田「私らみたいな年寄りには、安いからと言つて遠くまで買いに行く足がない」

雪絵「家族にちよつと買ってきてもらえばいいじゃないですか？」

藤田「家族に頼もうにも、年寄りだけの家は どうする？」

雪絵「そういえば、隣のおばあちゃんも一

人暮らしだ……」

藤田「大きなスーパーも必要だけど、うちみたいな店も必要なんだよ」

雪絵「じゃあ、銀ビルはやっぱり必要ないんですか？」

藤田「それはあんたが言い出したことだ。どうして必要だと思つたのか、もう一度よく考えることだな」

雪絵「それは、街の人たちが集まる場所があればいいと思つて……」

藤田「思つて……どうした？」

雪絵「あの写真……」

藤田「ああ、うちの店が銀ビルの一階に入つたときの写真だ」

雪絵「……(無言)」

藤田「どうした？」

雪絵「あの、端っこに半分写ってるの、私と父です」

藤田「なんだつて？」

BGM

雪絵「あのスカートの猫のアップリケ、母が付けてくれたんです」

藤田「そうか、あんたとは意外なところでつながりがあったな」

雪絵「藤田さん、私、絶対に銀ビルを回します！ 私はこの街が大好きだし、この街に住んでる人が好きです。でも、想い出だけじゃ、この街は前に進めない！」

だから絶対、銀ビルを回します！」

藤田「意気込みは買うよ」

雪絵「藤田さん」

藤田「なんだね？」

雪絵「商店街の方々は、銀ビルをどう思っているんでしょう。銀ビルに対する思いを聞かせてもらえる場を、設けていただけませんか？」

藤田「そうか。……よし、なら、この隣のフリースペースを使うといい。うちの持ち物だから、遠慮はいらん」

雪絵「ありがとうございます！」

(間)

雪絵「いよいよ、このレストランが回るんですね」

高杉「テナントは結局ダメだったけどね」

山田「でも、おかげで商店街の皆さんとも、折り合いがついて顔が立ちました」

菊地「ここまでこぎつけられたのも、皆さんの努力なくしては、ううっ(泣く)」

竹内「菊地さん、涙出てませんか」

佐藤「さあ、最終チェックだ。展望レストラン、動かすぞ」

SE 大きな歯車が動き出す音。

雪絵「やった！ 動いた！ ほら、床が回ってます！」

菊地「最初の点検で動かなかったときは焦ったけど、東京から重たい部品を持ってきてもらった甲斐があったね」

雪絵「はい！ ああ、いよいよ明日、この展望レストランがお客様でいっぱいになるなんて、夢のようですね」

SE 携帯電話の鳴る音。

山田「はい。山田です。え？ あ、え？

嘘でしょう？」

雪絵「どうしたんですか？」

山田「パートでレストランに入ってくれてる予定の人が、昨日の雪ですべて、骨折したって」

SE 別な携帯電話がなる音。

菊地「もしもし、菊地です。はい、へっ？

マジっすか？」

高杉「今度は何？」

菊地「こっちも！ 子供さんが肺炎で入院

したから行けないって」

佐藤「開店初日に手が回らないな」

雪絵「明日だけ、明日だけ私たちも手伝いませんか？」

山田「レストランを俺たち素人が？」

雪絵「ウエイトレスなら私たちにも出来ませぬ。接客の心は売り場によって変わらな

いでしょ？」

菊地「俺、やったことないけど」

雪絵「やらなきゃダメなんですよ。市民の皆さんは楽しみにしてくるんだから」

菊地「わかった」

(間)

SE 吹雪の音。

竹内「今年は根雪になるの遅かったんですけどね」

山田「初日からこんな吹雪じゃなあ……」

雪絵「ここの有線放送、ラジオって入りましたっけ？」

SE ラジオの天気予報。

アナウンサー「空知地方です。今日、日本の天気は雪、風共に強く、吹雪。降雪量は一時間で二十センチから三十センチ、多いところでは四十センチ近く積もる

予報です。……(続く)」

菊地「ひゃー、街ごと埋まっちゃうよ」

竹内「期待集客数の半分……、来ればいいかもね」

山田「集客どころの騒ぎじゃなくなっちゃいましたね」

佐藤「まあ、今日一日の結果がすべてじゃないし」

山田「でも、明日も吹雪だって……」

雪絵「仕方ないです。天気は運です。さ、たとえたった一人のお客様でも、満足してくださるよう、とびきりの笑顔でお迎えましようよ」

SE 内線電話の鳴る音。
受話器を取る音。

菊地「ま、マジっすか？ 大変だ！」

佐藤「どうした！」

菊地「お客さんが！」

竹内「さっそくクレームか？」

菊地「そうじゃないですよ。あまりにも沢山来たので、今、一階の正面ロビーを早めに開けて、中に入ってもらったって」

雪絵「ホントなんですか？」

菊地「こっちも開店準備、急いでくれって」

雪絵「じゃあ、レストラン回しますよお」

SE 床が動き出す音。

雪絵「これでよしっ」と

SE 床の動きが停止する音。

警報音。

雪絵「あれ？」

SE 床が動き出す音。

警報音。

床の動きが停止する音。

佐藤「何やってるの？」

雪絵「佐藤さん！ 床が！ レストランが回らない！」

一同「何だって？」

竹内「まずい、まずいよお」

菊地「回らないんじや、このレストランの意味がない」

山田「菊地さん、それを言っちゃおしまいですよ」

菊地「でも……」

館内放送「おはようございます。皆様の銀座ビルディング、開店のお時間でございます」

SE レストランのざわめき。

食器の触れ合う音。

客の『回ってないの？』的ガヤ

雪絵「申し訳ございません。設備に不備がございまして、本日はやむをえず……」

菊地「(不特定多数に) いらっしやいませ」

雪絵「(不特定多数に) いらっしやいませ」

梅子「まあ、今日は七番館にいないと思ったら」

雪絵「あ、渡辺様」

梅子「懐かしいわ、この雰囲気」

雪絵「こんなカンジでしたか？」

梅子「そうそう、こうやっていろんな人が

集まっていた。親子連れだったり、恋人同士だったり。実はね、ここ、夫と私の、初めてのデートの場所だったのよ」

雪絵「(涙声) そうだったんですか？」

梅子「どうなさったの？」

雪絵「(涙声) 本当は、このレストラン、回るはずだったんです。でも、回りませんでした。折角の思い出の場所なのに」

梅子「泣かないで。あなたはこの街のために頑張ったじゃない」

客1「ええっ！ 回らないの？」

客2「どうして？」

客3「せっかく来たのに」

客4「回んねーんじや意味ねーよ」

藤田「意味はある！」

BGM

藤田「確かにこのレストランは回ってないかもしらん。だが、ホントに大事なことはここを回すことか？ そうじゃない、こうして、みんなが集まろうとする心を育てることだ。レストランじゃなく、街を回すと言うことだ」

雪絵「藤田さん……」

藤田「あなたたち若い人も、そちらの奥さんも、そっちのお父さんとお嬢ちゃんも、みんな、楽しみにここに来たんでしょ？」

SE 一人の拍手。

段々と増える拍手。

藤田「中村さん、あんたには負けたよ」

雪絵「藤田さん」

藤田「若いモンのやることは、どこか現実離れして、夢ばかり見て……そう思ってた」

雪絵「私こそ。お年を召した方々には、これからゆつくり休んでいただいで、私たちが頑張ればいいと……」

藤田「年寄り扱いか」

雪絵「でも、そうじゃないってわかったんです。年齢は関係ない、大事なことは、この街に住む人みんなが参加すること。

回っていなかったのは、このビルじゃなくて、自分の街を自分で元気にしていこうという気持ちだって」

藤田「そうだな。私もそうかもしれな」

雪絵「まだ頑張れる、そう思います」

藤田「うむ。私の店もまだ商売敵として頑張るからな」

雪絵「私も負けません！」

藤田「意気込みだけは一人前だな。はっはっはっは(高笑い)」

SE デパートの売り場のざわめき。

雪絵「いらっしや……いませ」

藤田「はい、いらっしやいました」

雪絵「藤田さん、今日は、何か……」

藤田「敵陣を偵察に来た」

雪絵「えっ、偵察ですか？」

藤田「（高笑い）というのは冗談だ。あんたが普段、どんな風にこの街を愛しているか見に来た」

雪絵「日々イキイキと仕事に励むことが、この街を愛することだと思っております」

藤田「よろしい。それと、そのう……」

雪絵「はい？」

藤田「うちの家内をもっとキレイにする化粧品というか……」

雪絵「奥様をいつまでも輝かせるアイテムでございますね。でしたら、こちらなどいかがですか？」

Σ